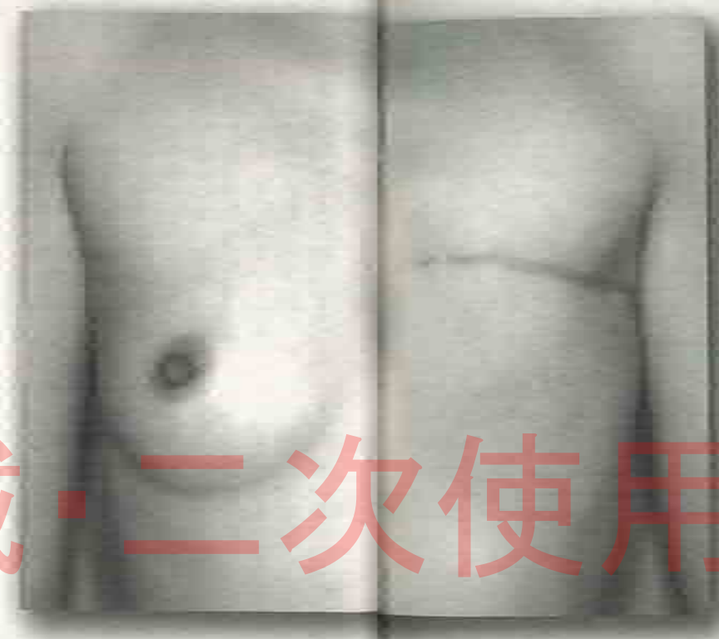
74才の乳房再建

「命の方が大切でしょ」この言葉で
乳がんに罹った女性の多くがあきらめてきた乳房。
苦悩の末受けた手術までの道のり

女性の23人にひとりが罹るといわれる乳がん。温存療法の一方で、進行度や腫瘍の位置によっては、全摘出を余儀なくされるケースも少なくない。乳房の喪失は女性に想像以上のダメージを与え、なかにはうつに陥る人もいる。そんな女性たちを救い続けるひとりの女性医師と、再建に挑んだ患者たちが手に入れたものは——



取り戻したのは おっぱいだけじゃなかった

その30代の母親は、右の乳房を失ってから、幼稚園に通っている子供と一緒にお風呂にはいれない、とつぶやいた。切除の跡は見せられない。だから、自分はTシャツを着て子供をお風呂に入れてあげるという。

40代の女性は両側乳がんを告知され、両乳房を切除することを医師から告げられた。命とおっぱい、命と胸——頭のなかからその言葉が離れず、毎日泣き暮らした。

摘出手術後、眠れなくて抗うつ剤をのむようになった別の40代の女性は、お風呂で手術の跡を一度も見ていない。だからきれいに洗うことができず、胸の部分に垢がたまってしまっていたという。

世間ではいわゆる豊かなバストを誇る巨乳女性タレントが、男性だけでなく同性の支持をも集めている。小さな胸にコンプレックスを抱き、豊胸手術を受ける女性も年々増え、日本人の「おっぱい信仰」はある意味、ピークを迎えているともいえるだろう。

この人たちのおっぱいの話は、それとは別の次元の話だ。日本女性の23人にひとりが罹るといわれる乳がんにより、乳房を失い、心に大きな傷を負う女性たちがいる——

転載・二次使用禁止

福岡第2の都市、北九州市・小倉の駅からタクシーで10分ほど走ると現れるモダンな3階建ての建物。そこが「矢永クリニック」である。クリニックの院長、矢永博子医師（52才）は、前に座る女性患者の言葉に熱心に耳を傾け、何度も、何度も頷く。

「そうね、それはいいことね」「あら、そうなの。いいじゃない」「ほんと？」

「最近、手術した仲間と〝シワもとりたいよね〟とか、〝どうやってきれいになろうか〟って話しているんです。なんだか毎日が楽しくてね。これも先生のおかげです」

という女性、大森陽子さん（仮名・52才）は、'04年3月に北九州市内の病院で左側の乳がんの摘出手術を受けた。同時に組織拡張器（エキスパンダー）という人工の装置を胸に埋め込んだ。失われた乳房に代わる人工乳房を入れるスペースを作るためだ。手術を担当した医師に紹介されたのが矢永クリニック。1年あまりかけて形を整え、乳輪や乳頭を作っていく。大森さんはいう。

「乳房再建をしたいっていい出したのは私のほうからです。**最初はね、担当の先生に反対されたんですよ。〝再発を発見しにくくなる〟、〝100万円以上もかかる〟って**」

開放的でサロンのようにおしゃれなクリニックの内装に、不安を抱える多くの女性たちは癒される。

しかし、大森さんの熱意に担当医も折れた。「がんを摘出してみて、エキスパンダーを入れられるような状態であれば入れてみましょう」。そう約束してくれた。

「麻酔が切れて目覚めたときには、すでに左側のわきあたりにふくらみができていました。その後矢永先生が調整してくださいました」

美しい造形物としての乳房を作らなくては

現在、日本人女性がかかるがんとしては、罹患率がもっとも高い乳がん。医療技術の進歩により乳房を残す温存療法も可能になり、多くの人がその恩恵にあずかることができるようになった。その一方で、進行度や腫瘍の位置によっては、乳房をほとんど切除しなければならないケースも少なくない。

乳房の喪失は、想像以上の苦しみが伴う。そして、その苦しみを救う医療として、ここ10年あまりで急速に注目を集め始めたのが乳房再建だ。

乳房再建とは、切除してしまった乳房や乳輪、乳頭を新たに作る（再建）という治療。アメリカで始まり、二十数年前から日本でも行われるようになった。

いま日本で行われている方法は、自家組織による再建と、組織拡張器を用いた人工乳房による再建の2種類だ。

自家組織による再建は、患者自身の体の一部（腹部や背中など）の皮膚と脂肪と筋肉を胸に移植する方法だ。自分の体の一部であるため違和感が少ないが、組織を供給した部分に大きな傷跡が残り、手術や入院にも時間がかかる。

一方、人工乳房による再建は、組織拡張器という生理食塩水を注入する袋のような装置を胸の筋肉の下に入れ、少しずつ皮膚をのばし、ある程度まで大きくなったら装置と人工乳房とを入れ替える方法である。胸の傷は小さく、手術時間や入院期間が短いといった利点もある。

ただ、いずれの乳房再建も、日本で実践している施設は少なく、スペシャリストは十数人程度といわれており、まだまだ再建に踏み切る人も少ない。**その数少ない専門家のなかで現在、年間120から160の症例をこなす乳房再建のエキスパートであり、きれいな乳房の形と乳頭、乳輪を再現してくれるのが、矢永医師だ。**

矢永医師は現在、麻酔科医の夫・克さん（42才）と小倉で矢永クリニックを開業、今年の7月で6年目にはいる。乳がん手術後の乳房再建・乳頭乳輪再建のほか、一般的な形成外科手術や、培養表皮・培養軟骨移植などの再生医療、シワやたるみの治療、フェイスリフトなど美容外科手術を行っている。

聖マリアンナ医科大学大学院（神奈川県川崎市）で細胞培養や組織再生を学んだ矢永医師は、聖マリアンナ医科大学形成外科、久留米大学形成外科講師を経ながら、ライフワークとして乳房再建と再生医療に取り組んできた。'01年に整形外科医の克さんとともにクリニックを設立。1年後、克さんはより安全で患者が安心できる手術を目指し、麻酔科医をメインの仕事に切り替えた。克さんはいう。

「独立したのは、自分たちの理想とする医療をやりたかったからですね。実際、クリニックで一緒に仕事をするようになって、〝彼女は途方もないことをしようとしている〟と感じるようになりました。ですから、彼女が患者さんの希望に応えるためには、ぼくが麻酔をメインの仕事とし、サポートに回ることがベストだと、自然に思うようになっていったわけです」（克さん）

なぜ、矢永医師は乳房再建をライフワークとしたのか。

「私が最初に乳房再建手術に携わった20年ほど前は、乳がんの患者さんの乳房を大胸筋ごと大きく取ってしまうハルステッドタイプの手術が主流でした。**手術を受けた患者さんはみなさん、女性としての自信を大きく失っていました。でも乳房を再建すると、まったく別人のように明るくなる。それに衝撃を受けたのかもしれません**」（矢永医師）

夫・スティーブンさん（左）と「温泉に行きたいわね」と語る木下さんは、今年2月に乳房が完成した。

当時はいまとは違い、一般的にはただお腹や背中の皮膚・脂肪・筋肉を胸に充填するだけの手術が行われていた。それでも患者さんは喜んだという。

しかし、乳房再建にかかわり続けた矢永医師はやがて、〝乳房のようなもの〟を作るだけではだめ、美しい造形物としての乳房を作らなければ、と思うようになった。

「それで一生懸命、どうしたらきれいに乳房を再建できるかな、と考えるようになったんです」（矢永医師）

その一途でひたむきな思いから矢永医師が生み出したのが、より自然な乳頭乳輪を再生することであった。

太腿のつけ根の皮膚を移植して乳輪を作製し、人工骨を使って乳頭の高まりを作る技術。乳頭は花びらと花のつぼみから得た発想で、それにより「より自然で美しい」乳房の再建が可能になった。

ほかにもひとりひとりの乳房、乳頭、乳輪にさまざまなアイディアや技術が生かされているという。

乳房再建は乳がんをわずらった女性の、一筋の光である。とはいえ、新しい乳房はすぐにできるわけでも、簡単にできるわけでもない。

再建の手術にはタイミングによって、乳がんの摘出手術時に組織拡張器を入れる同時再建と、手術後に再建する二期再建がある。いずれの場合も、最初の再建手術から乳房の形がある程度整うまでおよそ半年。それから乳頭や乳輪の手術を行うため、腫れがひいて落ち着くまで、数か月から1年はかかってしまう。

オペ中の真剣な表情とはうって変わり、患者さんたちに対する矢永医師の視線はとても穏やか。

「もう私、人間じゃなくなったのかな」

大森さんは同時再建だった。'04年3月に左の胸に3・5センチ大の腫瘍を発見。がんの大きさから全摘しか方法がないと告げられた。たまたま相部屋になった女性が同時再建をすることを聞き、担当医に相談。再建に対して後ろ向きだった外科医を自ら説得し、乳房を手に入れた。

しかし、いまでこそ再建手術を受けてよかったと話す大森さんも、同時再建をしてからいまのように落ち着くまでは、周囲が想像もつかないようなつらい経験をしている。

まず、手術時に入れた組織拡張器が本来の胸の位置ではなく、肩の下ともいえるような高い位置にはいっていたことに、ショックを受けた。

「手術後初めてお風呂の鏡でなくなった胸と、肩の下にはいった拡張器を見たときには、泣きそうになりました。〝もう私、人間じゃなくなったのかな〟って」（大森さん）

矢永クリニックで矢永医師から説明を受けたときも、「（再建が終わるまで）1年はかかると聞き、気が遠のいていきそうになった」という。

さらに〝異物〟がはいっていることへの違和感や、がんの手術をしたことによる不安と落ち込みから、心も体も限界だったのか、過呼吸症候群や帯状疱疹にも罹った。

何度もくじけそうになった大森さんを勇気づけたのは、夫と2人の娘の励まし、そしてもうひとつ、余白に携帯電話番号が書かれた矢永医師の名刺だった。**初診のとき、不安そうにしていた大森さんに、「気になることがあったら電話して。何時でもいいから」と、渡してくれたものだった。**

不安や異物感などに限界を感じた大森さんは、何度も「（エキスパンダーを）出してほしい」といった。そのたびに矢永医師は、「出すのは簡単なの。でも、明日までガマンしてみましょうよ。それで、どうしても無理だったら、明日出しましょう」という。

「それで、翌日まで頑張ると、もう少し入れておこうかなって（笑い）」（大森さん）

そして、最初の予定より早く、半年あまりで大森さんの再建術は終了。当初は肩の下に無造作に入れられただけのエキスパンダーは、見違えるほど美しい乳房へと変容した。

「乳頭と乳輪ができてから初めて鏡を見たとき、思わず、〝うわー〟って。すごくうれしかった。夏場は着ることができなかったTシャツが着られるようになったんです。**家族も私が元気になって、喜んでいます**」（大森さん）

転載・二次使用禁止

女性が胸をなくすということはどれだけ酷で、つらいことか。摘出手術を受けた多くの女性を見てきた矢永医師は、それを知っている。だからこそ、患者を勇気づけ、励まし、できる限り安心して施術を受けてもらえるように心を配る。

しかし一方で、それほどのつらい思いを抱えているにもかかわらず、なかなか乳房再建に辿り着けない女性も多い。それはなぜか。

ひとつに経済的な理由が挙げられる。乳房の再建手術をする場合、一部の治療法には保険が適用されるが、多くは自費診療になってしまう。**一般的に100万円以上といわれているが、施設によってはかなり額に差がある。海外では何百万円とかかるという話もある。**しかし大森さんもこのクリニックで治療を受けた別の女性もそこまで高額ではなかったという。

もうひとつ、大きな障害となっているのは、乳がんの再発に対する誤解である。その多くは大森さんのように「再発が発見しにくくなる」と担当医に反対されるケースだ。矢永医師は、「これは昔のイメージで、必ずしもそうではないんです」という。

「人工乳房は大胸筋という筋肉の下にはいります。局所再発は筋肉の上に発生します。ですから人工乳房の存在により局所再発の発見の妨げになることはありません。**人工乳房の場合はむしろ、薄い皮膚の下は人工物なので、万が一しこりができたらポッコリと出ますので、逆にすぐにわかるんです。**また、いまは画像診断が発達していますから、定期的にMRIや超音波診断（エコー）をしていればちゃんと発見できます」

しかし、いまも昔のイメージを持ち続け、再建を望む患者にやめたほうがいいという外科医も少なくないという。その命の代わりに乳房を諦めなければならない。そのことに釈然としない思いを抱え、落ち込んでいく女性も多いのだ。

「君の胸が3つあっても ぼくは構わないよ」

もちろん、こうした女性たちを救うのは、医師だけではない。家族、とくにパートナーの理解は何よりも大切だ。

ビジネスパートナーであり、夫でもあるアメリカ人のスティーブンさん（63才）と一緒に現れた木下彰子さん（59才）は、現在、100人の従業員を抱える語学関連の会社を経営している。乳がんが発見されたのは、'99年の夏だった。

木下さんは電話をするとき、左手で子機を持ち、左手のひじあたりを右手で支えるような格好をする。これがいつもの電話のスタイルだった。その日も同じ格好で電話をしていたところ、左の胸にできた小さなしこりに気づいた。

「硬い。まずいな——」。知人の医師に相談し、検査をしたところ、やはり結果は乳がん。9月に摘出手術をした。

「胸を取るということについては、正直いってあまり悲しいとか、嫌だとか思わなかった気がする」とにかくそのときは仕事の予定がつまっていて、それどころじゃなかったんですね」（木下さん）

しかしその言葉とは裏腹に、当時の日記には、「手術室に搬送されるストレッチャーの上で、涙が止まらなかった」と綴られている。

手術後、抗がん剤の治療を受けながら、気丈に仕事を続けた木下さん。胸はパッド入りのブラジャーを着けることで、フォローした。

「タンクトップも着ていました。ものを落としたとき（パッド入りのブラが見えるから）前かがみにはなれなかったですね」

翌年、夫のスティーブンさんが、くも膜下出血で救急病院へ搬送。ICU（集中治療室）で5週間、生死の境をさまよった。現在は足が少々不自由なものの、次から次へとジョークを飛ばすほどに回復したが、倒れてからずっと医師や病院選びから始まり、リハビリにもつきあい、心身共にスティーブンさんを支えたのは木下さんだった。

「ケンカもしましたよ、へりくつやわがままばっかりいうから。もう、知らない。って（笑い）」（木下さん）

乳がんの手術後、担当医から「再建をするなら2、3年は待って」といわれていた木下さんだが、再建のことは考えていなかった。しかし昨年初め、たまたまテレビで乳房再建の特集を見た。「やってみようかな」——医師の紹介で、矢永医師を訪れた。

人工乳房による再建は、まず冒頭の58～59ページの写真の状態に、組織拡張器（左上）を入れ、生理食塩水を注入して徐々に皮膚を伸ばし（右上）、その後、組織拡張器を抜いてコヒーシブ（左下）などの人工乳房に入れ替える（右下）。

「先生の『タンクトップが堂々と着られるわよ』という言葉で決めました」（木下さん）

夫も賛成し、こういった。

「乳房がなくなっても君であることには変わりないけれど、再建することで君が幸せになるなら、ぼくは大賛成だ。（胸が）3つあったって構わないよ（笑い）」

木下さんは二期再建になるため、まずは手術で組織拡張器を入れ、生理食塩水を徐々に追加注入して、胸の皮膚を広げた。ある程度の大きさになったら組織拡張器を取り、代わりに人工乳房を入れる。乳頭、乳輪の手術も終え、今年2月に完成した。胸が豊かだったことから、大きさの合う人工乳房がなかった。左右の大きさのバランスを整えるため、右の胸を少しだけ小さくした。

「『いまより3センチ（トップの位置が）高くなるわよ。っていわれて、右も受けました。彼女の腕を信頼していたので意外なくらい不安はなかったんです」（木下さん）

大森さんも木下さんも口を揃えていうのが、矢永医師の患者に対する心遣いとていねいな説明だ。

大森さんの診察日以外の日に病院に行って、質問をしたこともあった。それでも矢永医師は丁寧に、何度も答えてくれた。

そして最後にはかならず「大丈夫。絶対、大丈夫だから」と勇気づけた。

大森さんは、「こんな患者思いの先生もいたんだ」と驚いたという。一方木下さんは、「彼女の言葉は自信に満ちている。だから安心して任せられる」と話す。

実際、単に一方通行の説明をして、患者に同意を促すようなことはしないように心がけていると、矢永医師。

「初診時に乳房再建の全般的な話をまとめた『しおり』をお渡しします。

次に、術前検査のときに乳房再建手術と麻酔に関しての説明と同意書の書類をお渡しして、あらかじめ患者さんに読んでいただきます。

その後で私が手術について、30分くらいずつ説明します。

「母のことがなければ、このまま死んでもいい」と

それでわからなかったら、もう一度同じように説明します。責任をすべて負うのは私たち。だからいかに安全な手術ができるかということを考えるのと同時に、どうやったら患者さんにきちんと伝えられるかということを最優先にしています」

スティーブンさんのように理解のある男性もいる。その一方で、日本にはまだまだ女性にとって乳房がどんなに大切なものか理解できていない男性も多い。「命があればいいでしょ」「いい年して、いまさらもういいじゃない」——その言葉が、どれだけ傷ついた女性たちに追い打ちをかけているのだろうか。

それでも74才になって乳房再建を果たし、「何才になっても女」である実感している女性もいる。橋本カヨさん（仮名・76才）だ。

橋本さんは46才で右胸を切除。ハルステッド手術だったことから、大胸筋を含めて乳房の周りを大きく切り取った。橋本さんは独身で、7人のきょうだいがいたが、ひとりがすでに亡くなっていた。そのときの母の嘆き悲しむ姿を目にしていたことから、とても自分の病名を告げられず、「結婚するからしばらく会えなくなる」と嘘をついて入院、手術を受けた。

「母のことがなければ、このまま死んでもいいと思いましたね。それほど胸をなくすのは嫌でした」（橋本さん）

当時、乳がんにかかった女性にとって治療の選択肢はひとつ、大胸筋ごと大きく切り取ることしかなかった。いまのように、女性たちが「女性であることの大切さ」を声高にいえる時代でもなかった。もちろん、再建手術も普及しておらず、多くの女性は片方の胸を隠すようにして生活するしかなかった。

橋本さんはその後もひとりで暮らし続けたが、あまり外にも出ず、仕事以外は家の中にこもる日々が続いた。

「洋服だと胸がないのが目立つので、目立たない和服ばかり着ていました」（橋本さん）

再建のきっかけは4年前、シルバーマンションへの転居だった。

「そのマンションには大浴場があるんですけど、胸が気になってはいれない。思い切ってはいるときもタオルで隠して、いじけてすみのほうにいました」（橋本さん）

内向的な性格は相変わらずで、マンションの住人がイベントに誘っても、それをかたくなに断っていた。

何とかしたい、そう思った橋本さんは、唯一乳がん手術のことを打ち明けていた親友に相談。「友人が再建手術した」という矢永クリニックを紹介された。そして、周囲に「しばらく旅行に行く」といって入院し、再建を受けた。

橋本さんが受けたのは、自家組織の乳房再建だった。お腹の皮膚、脂肪と筋肉を移植して乳房を作った。入院は長かったけれど、これを機に橋本さんは大きく変わった。

「自分でも不思議なんですけど、マンションに帰ってきた

新 われらの時代に

麻酔科医である克さん（左）がいることも、患者にとっては大きな安心に繋がる。

乳頭を作るため、人工骨をちょうどいい大きさに削る。

転載・引用禁止

ら、性格が一変したんですよ。あれほど引っ込み思案だったのに、ほがらかになって、何でも率先してやるようになったんです」（橋本さん）

橋本さんのあまりの変身に、周囲も驚いた。彼氏ができたのでは？と噂も立った。

「聞かれても、〝想像にまかせます〟っていってるんですよ（笑い）」（橋本さん）

マンションで開催されたスポーツ大会にも参加し、見事優勝した。

「スポーツなんて胸を取ってから、ほとんどしていなかったのに。優勝までしちゃうなんてね」（橋本さん）

自家組織を移植したことで、お腹のぜい肉が取れたこと、乳房ができてから胸を張って歩くようになったことで、周りからは「スタイルがよくなった」「きれいになったね」といわれることも多いと、顔をほころばせる橋本さん。

「いま、何をしても楽しいんですよ。私にとっていまが青春なんです。そう、春から社交ダンスを始めてね、若い先生に教わっているんです。体が軽いし、進歩が早いって褒められたんですよ」

これまで多くの女性たちを救ってきた矢永医師。が、こう話す。

「私は神様じゃないので、なくした乳房とまったく同じに作ることはできませんし、左右まったく同じにはなりません。でも、これならいいと納得してくださるところまでいけるように、私は努力してがんばります」

患者の喜ぶ顔が何よりもの原動力という。

「そういう意味ではありがたい職業。笑顔があったから、こうして続けてこられたんだと思います」（矢永医師）

今後の夢は？と尋ねると、しばらく考えた後こういった。

「乳房再建に関して、もう少し外科医の理解が深まってもらえたらいいんですけど…。だから少しでも多くの医師にわかってもらえるように、訴えていきたいですね」

乳がんの患者にも、乳房を再建できることを知ってもらいたいという願いもある。

「再建手術をした患者さんたちが、いま乳がんで悩んでいるかたたちのところへ行って、たとえば病棟で、ご自身の体験を話してくれたらいいでしょうね」

女性のみにある〝乳房〟のふくらみ。その〝重み〟は、大きさや形に関係なく、女性ならば誰しもが感じていることだろう。彼女たちは、乳房を失うことで失っていたものを、再び取り戻した。〝再建〟したもの――それは乳房だけではなかった。

取材・監修・撮影／伊藤華也　取材・文／山内リカ